

## 大学生における友人関係と自我同一性との関連

松下姫歌・吉田 愛

### The relations between friendship and identity in university students

Himeka Matsushita and Ai Yoshida

本研究では、大学生を対象に、岡田 (1995) の友人関係尺度と谷 (2001) の多次元自我同一性尺度 (MEIS) を用い、どのような友人関係のあり方が大学生の自我同一性の確立に影響を与えているか、また、友人関係のあり方によって影響を受ける自我同一性の次元が異なるかどうかについて検討した。その結果、友人に気を遣う人や友人との深い関りを回避する人は、自我同一性の確立感が低く、積極的に友人との快活な関係を求め、自己を開示する関り方をする人は、自我同一性の確立感が高いことが示された。また、友人関係のあり方によって影響を受ける自我同一性の次元が次のように異なることが明らかとなった。特に、友人に気を遣う関り方と、友人との深い関りを回避する関り方は、どちらも自我同一性の感覚の掴み難さと関係するが、影響を与える次元は異なる。特に、他者から見られた自分と本来の自分との一致の感覚は、友人との関りを回避する友人関係のあり方において課題となることが示された。また、社会との適応的な結びつきの感覚は、積極的に友人に自己を開示する関り方によって獲得されており、従来の青年期の特徴でもある“親密で内面を開示し合う”友人関係の必要性が示された。

**キーワード** : 友人関係, 自我同一性, 大学生

### 問題と目的

#### 1. ライフサイクルと青年期

青年期とは、児童期と成人期の間にあたる、子どもから大人への過渡期である。青年期の区分については研究者によって多少の意見の相違はあるが、おおむね13歳から20歳までを指し、近年では中学入学頃から大学卒業頃(13～22歳頃)の年齢を指すことが多い。生涯発達の見点から、青年期を、中学生期に相当する「青年期前期」、高校生期に相当する「青年期中期」、主に大学生期に相当する「青年期後期」の3期に分けて捉えることも多い(二宮・大野・宮沢, 2006)。

この青年期は、親から心理的に離れ、個を確立する「第二の分離—個体化」の時期 (Blos, 1967) とされており、青年期に入ると、人は、自分らしさを模索し始め、親から自立したり社会へ足を踏み出したりと、独立して生きていくように準備を始める。この時期にはそれまで形成されてきた心理過程としての信頼感、自他の区別、積極性、有能感が確かなものであるかどうかを試される。それまでは親や教師、その他の影響の強い人たちの願望や期待に応えたり、あるいは自分が親や教師を理想化したり拒否したりして反価値的に実現しようとしていた「自分」であったのにすぎないのに対し、青年期の「自分」は初めて自分が自分に対する問いとして、「自分とは何か、

何者になろうとしているのか、何者になり得るのか」が始まるのである(鑑, 2002)。

こうした青年期の課題について、Erikson (1950) はライフサイクル (life cycle) という観点から論じている。彼は、人間の心は生まれてから死に至るまでの人生周期 (ライフサイクル) を通じて発達し続けるものとし、8 段階からなる漸成発達図式 (epigenetic schema) を提唱した。各段階はその段階に特有の心理社会的発達課題によって特徴づけられており、その時期に余儀なくされる課題に向き合うことで心的発達に質的な変化が生じる。その意味で、各段階の発達課題は臨界点としての「危機 (crisis)」的様相を帯びる。この図式において、青年期は第V期にあたり、その発達課題は「自我同一性 (identity) 対 自我同一性拡散 (identity-diffusion)」]、すなわち、自我同一性のひとまずの確立が求められる時期とされている。

## 2. 青年期の自我同一性

Erikson (1959) は、自我同一性を、精神、人格を理解するための鍵概念として提唱した。Erikson (1959) によれば、自我同一性の感覚は、「内的な斉性 (sameness) と連続性 (continuity) を維持しようとする各個人の能力 (心理学的意味での個人の自我) と、他者に対する自己の意味の斉性、連続性とが一致した時に生じる自信」である。つまり自我同一性は、斉性・連続性をもった主観的な自分自身が、周りからみられている社会的な自分と一致するという感覚を表す概念であると言える。この自我同一性は、自己の内面への強い関心と、人間のライフサイクルの各段階における、重要な他者 (significant others) との関わりを通じて形成されていき、その対象は、母親から親、家族、仲間、パートナーへと移行していくという (Erikson, 1959)。

谷 (2001) は、Erikson の自我同一性概念を整理し、自我同一性の感覚は、次の4つの下位概念から構成されることを指摘した。すなわち、自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという感覚を表す「自己斉性・連続性」、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚を表す「対自的同一性」、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分と一致しているという感覚を表す「対他的同一性」、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を表す「心理社会的同一性」の4つである。なお、谷 (2001) は、以上の4つの下位概念に基づき、質問紙項目を作成し、因子分析の結果から、この4つの下位概念に対応する4因子を抽出し、高い信頼性や妥当性を持つ多次元自我同一性尺度 (MEIS) を作成している。

## 3. 青年期の友人関係

青年期の対人関係の中心は、児童期までの親子関係から、友人関係へと移行していき、青年は友人関係を築く中で自己を見出ししていく (松下・吉田, 2007)。そしてこの友人関係の新たな展開が、青年期の重要な課題の一つとして挙げられている (金子, 1995)。

落合・佐藤 (1996) は、同性の友人関係を「友人との関わり方に関する姿勢 (深い—浅い)」と「自分が関わろうとする相手の範囲 (広い—狭い)」の2次元で捉え、青年期における友人関係は、年齢と共に、浅く広いつきあい方から深く親密なつきあい方に発展していくと論じている。岡田 (1995) は、このような、親密で内面を開示し合い、人格の共鳴や同一視をもたらすような友人関係を、従来の青年期の友人関係の特徴として挙げている。

しかし、近年、青年期の友人関係における“希薄さ”が指摘されており、こうした自分の内面を開示するような深く親密な友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけあわないよう表面的に円滑な関係を志向したりする傾向が見られる (千石, 1991 など)とされている。この点について、岡田 (1995) は、学生相談の臨床的知見と質問紙調査を用いた一連の研究から、現代大学生の友人関係の特徴として、表面的

で快活な関係を求める傾向を示す「群れ」、友人に気を使う傾向を示す「気遣い」、友人との深い関わりを避ける傾向を示す「関係回避」いう3つのタイプを見出している。

#### 4. 友人関係と自我同一性

鎌・山本・宮下 (1984) は、自我同一性の確立の程度は、他者との関わりの方 (深さと広さ) を大きく規定するものであると述べている。「自分を他者との間でどうつかんでいくか」と、「自分が他者とのように関わるか」は、表裏一体の課題である。その課題には、「私は他者とは異なるのか」という個別性をつかむことと、「私というものは、私にも他者にもある」という普遍性とを、いかにして見出すかという本質的な問題が含まれていると考えられる。このように、対人関係と自我同一性の確立には密接な関わりがあると考えられ、青年期の対人関係の中心は友人関係であることから、青年期においては、特に友人関係のあり方と自我同一性の確立との間の関わりが深いと考えられる。同じ青年期の中でも、「青年期後期」は、特に自我同一性の確立や他者との親密性を獲得すべき重要な時期であるとされ、この時期を対象とした自我同一性の確立や対人関係に関する研究が数多くなされている。

青年期の友人関係・他者関係と自我同一性との関連を検討した研究としては、宮下・渡辺 (1992) や金子 (1995)、安井・谷 (2008)、山本・岡本 (2008) がある。これらの研究からは一貫して、相手との親密な関係を回避したり、相手を過度に気にしたりするような関わり方と自我同一性の確立との間に負の関係があるという結果が示されている。これらの研究では、青年期の友人関係が自我同一性の確立に関連することは明らかにされているが、友人関係のあり方と谷 (2001) にて導き出された4つの自我同一性の次元のうちどの次元が関係しているかを直接検討したものはみあたらない。

谷 (2001) の MEIS を用いて、青年のふれ合い恐怖心性の精神的健康について抑うつと自我同一性の側面から検討した伊藤・村瀬・吉住・村上 (2008) は、「自己斉一性・連続性」及び「対他的同一性」がふれ合い恐怖的心性高群で低いという結果を得た。この結果は、ふれ合い恐怖的心性が高い人は、自分がない、他者から理解されない等、自我同一性の一部に危機が生じていることを示す。ふれ合い恐怖的心性とは、内面への関心が低く、親密な対人関係を回避する心性であり、岡田 (1995) の「関係回避」と類似した特徴を持つ。このことから、友人関係のあり方によっては、自我同一性の各側面との関わり方に差が生じるのではないかと考えられる。松下・吉田 (2007) は、現代青年の友人関係で指摘される“希薄さ”を“単に深く関われない”という側面で見るとはならず、いわば“希薄さ”の中身や性質を問うていくことが必要であると述べていることから、“自分をつかむ”という青年期の同一性の確立の様相を考える際に、表面的にフラットな付き合いである現代型の友人関係のあり方の下位分類に目を向けることは有用であると考えられる。

そこで、本研究では、特に「青年期後期」に相当する大学生を対象に、岡田 (1995) の友人関係尺度と谷 (2001) の多次元自我同一性尺度 (MEIS) を用い、どのような友人関係のあり方が青年期の自我同一性の確立に影響を与えているか、また、友人関係のあり方によって、影響を受ける自我同一性の次元が異なるかどうかについて検討する。

## 方法

### 1. 調査対象者

広島大学教育学部の大学生203名 (男性98名、女性105名) を調査対象者とした。平均年齢は20.07歳 ( $SD=0.89$ )

であった。

## 2. 尺度

### ① 友人関係尺度 (岡田, 1995)

青年期の友人関係の特徴を測定する尺度であり、「群れ」「気遣い」「関係回避」の3因子、計17項目からなる。本研究では、友人関係を問う項目表現について、より「友人」を意識させるよう、「相手」を「友人」、「みんな」・「友人グループ」を「仲間」に変更を加えた。また、岡田(1995)では6件法であるが、本研究では7件法にて実施した。

### ② 多次元自我同一性尺度 (MEIS) (谷, 2001)

Erikson の提唱する発達段階の第V段階である自我同一性の確立の程度を多方面から測定する尺度であり、「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4因子、計20項目からなり、7件法での評定を求める。

### ③ フェイス項目

フェイス項目として、性別、年齢、学年、学部を記入する欄を設けた。

## 3. 手続き

集団法にて実施した。講義の終了後の休み時間を利用し、受講生に対して質問紙を配布し、その場で回答してもらい、回収した。

## 結果

### 1. 因子分析、信頼性の検討

#### ① 友人関係尺度の構造と信頼性の検討

天井効果・フロア効果が見られなかったため、全17項目の評定値をもとに因子分析をおこなった。その際、逆転項目については、1から7の評定値を7から1に逆転させる処理をおこなった。スクリープロットや固有値の推移や説明率、解釈可能性から3因子解を指定し、再度、重みなし最小二乗法、*varimax* 回転による因子分析をおこなった。共通性が.16以下の項目や因子負荷量が.35以下の項目がなくなるまで因子分析を繰り返した結果、6項目が削除され、第1因子4項目、第2因子3項目、第3因子4項目の計11項目が採択された (Table 1)。

第1因子は、項目2(楽しい雰囲気になるように気をつかう)を除く全項目が岡田(1995)の「気遣い」因子に相当しており、項目2の内容も「友人に気をつかう」という「気遣い」の側面を含むと考えられるため、「気遣い」と名付けた。第2因子は、項目内容から、積極的に友人との快活な関係を求め、友人に自己を開示する関わりを表していると読み取れるため、「積極的」と名付けた。第3因子は、全ての項目が岡田(1995)の「関係回避」因子に含まれるものであったため、「関係回避」と名付けた。Cronbachの $\alpha$ 係数は、「気遣い」と「積極的」においては $\alpha=.70$ の値が得られ、信頼性は十分に確認された。「関係回避」については、 $\alpha=.66$ と信頼性を確認するためには問題がない程度の値であると考えられる (Table 1)。

本研究の結果では、岡田(1995)における「群れ」「気遣い」「関係回避」のうち、「気遣い」「関係回避」の性質は因子として抽出されたが、「群れ」因子の「群れ」性を特徴づける性質は抽出されなかった。具体的には、「仲間」との付き合いを重視した項目11(1人の友人と特別親しくするよりはグループで仲良くする)と項目16(仲間と一緒にいることが多い)は採択されなかった。第2因子の項目10(冗談を言って友だちを笑わせる)・14(ウ

けるようなことをよくする)は、岡田(1995)の「群れ」因子に含まれるが、上記の項目11や項目16のような「群れ」性を示す項目よりも、項目12「真剣な議論をすることがある」と結びついている(項目12は岡田における「関係回避」の逆転項目であるため、本研究でも評定値を逆転させている。その結果、第2因子にマイナスの負荷量を示しており、「真剣な議論をすることがある」という意味内容で第2因子に含まれることになる)。したがって、項目10や項目14は、「群れ」の集団での表面的な関係を求めるという側面ではなく、会話や触れ合いによる快活で積極的な関係を求めるという側面として抽出されていると考えられ、第2因子は「積極的」関係を示す因子として得られたと考えられる。

また、本研究で採択されなかった他の項目については、項目6(自分を犠牲にしても友人につくす)、項目15(友人との約束は決して破らない)、項目9(仲間のためにならないことは決してしない)は、「自分を犠牲にしても」や、「決して～ない」といった、かなり強い表現が使われていたことが影響したのではないかと考えられる。さらに、項目4(友人の言うことに口をはさまない)については、「気遣い」「関係回避」のいずれの因子にも.30程度の負荷が見られていることから、項目表現が、友だちへの「気遣い」にも友人との「関係回避」にも解釈し得るような項目であったため棄却されたと考えられる。

以上より、本研究では、岡田(1995)によって抽出された「気遣い」「関係回避」の特徴をそれぞれ反映した「気遣い」「関係回避」の2因子と、岡田(1995)の「群れ」の特徴のうち「関係の快活さ」を反映し、表面的な関係でなくむしろ積極的に友人に自分を開示する姿勢を持つ「積極的」の3因子を用い、分析を進める。

Table 1  
友人関係尺度の因子分析結果 (3因子解 重みなし最小二乗法 varimax 回転)

項目番号	項目内容	気遣い	積極的	関係回避	共通性
(群) 2	楽しい雰囲気になるよう気をつかう	.76	.17	.07	.62
(気) 8	仲間関係の中で互いに傷つけないように気をつかう	.66	.12	.14	.46
(気) 13	友達の考えていることに気をつかう	.60	.24	-.03	.42
(気) 3	仲間からどう見られているか気になる	.59	-.03	-.02	.35
(群) 10	冗談を言って友だちを笑わせる	.12	.93	-.06	.89
(群) 14	ウケるようなことをよくする	.19	.69	-.10	.53
(回) 12	※真剣な議論をすることがある	-.07	-.43	.09	.20
(回) 1	お互いのプライバシーには入らない	.21	-.10	.88	.83
(回) 7	お互いの部分にふみこまない	.15	.02	.69	.50
(回) 17	友達に甘えすぎない	-.11	-.09	.38	.16
(回) 5	※心を打ち明ける	.00	-.28	.36	.21
α係数		.71	.72	.66	
因子寄与率		25.957	21.147	12.192	
累積寄与率			47.103	59.296	
(回) 4	友達の言うことに口をはさまない	.31	-.20	.28	.21
(気) 6	自分を犠牲にしても友達につくす	.34	.15	-.28	.22
(群) 11	1人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	.26	.23	-.11	.13
(気) 15	友達との約束は決して破らない	.12	-.01	.17	.04
(群) 16	仲間と一緒にいることが多い	.32	.35	-.32	.32
(気) 9	仲間のためにならないことは決してしない	.33	.14	-.03	.13

( )内は岡田(1995)の下位尺度名：気=気遣い、群=群れ、回=関係回避。※は逆転項目。

## ② MEIS の構造と信頼性の検討

天井効果・フロア効果が見られなかったため、全20項目の評定値をもとに因子分析をおこなった。その際、逆転項目については、1から7の評定値を7から1に逆転させる処理をおこなった。スクリープロットや固有値

の推移や説明率、解釈可能性から4因子を指定し、再度、主因子法、*promax*回転による因子分析をおこなった。その結果、谷(2001)と同じ項目からなる4因子「対自的同一性」「自己斉一性・連続性」「心理社会的同一性」「対他的同一性」が採択された(Table 2,3)。Cronbachの $\alpha$ 係数は、全ての因子において $\alpha > .80$ の値が得られ、内的整合性における信頼性は十分に確認された(Table 2)。

Table 2  
MEISの因子分析結果 (主因子法 *promax*回転)

項目番号	項目内容	対自的同一性	自己斉一性・連続性	心理社会的同一性	対他的同一性	共通性
(対自) 7	自分がどうなりたいかははっきりしている	.86	-.11	-.03	.05	.68
(対自) 14	自分のすべきことがはっきりしている	.82	-.14	.15	-.04	.73
(対自) 1	自分が望んでいることがはっきりしている	.80	-.06	-.04	-.09	.56
(対自) 18	※自分が何を望んでいるのかよくわからないと感ずることがある	.68	.19	-.02	.03	.59
(対自) 9	※自分が何をしたいのかよくわからないと感ずるときがある	.61	.21	-.02	.06	.53
(連続) 6	※過去において自分をなくしてしまったように感ずる	.00	.88	-.05	-.04	.69
(連続) 11	※いつの間にか自分が自分でなくなってしまうような気がする	-.07	.78	.02	.06	.66
(連続) 2	※過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする	-.10	.70	-.10	.05	.43
(連続) 4	※今のままでは次第に自分を失ってってしまうような気がする	.02	.69	.03	.02	.53
(連続) 20	※「自分がいない」と感ずることがある	.23	.52	.07	-.05	.43
(社会) 17	現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある	.01	-.08	.85	.01	.68
(社会) 10	現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う	.00	.00	.79	-.06	.59
(社会) 15	現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う	.08	-.11	.76	.06	.61
(社会) 5	※自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする	-.07	.39	.56	-.10	.55
(社会) 19	※自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う	.01	.02	.45	.18	.32
(対他) 3	※自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う	.07	.03	-.14	.86	.71
(対他) 13	※人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感ずる	.01	-.04	-.07	.75	.50
(対他) 8	※本当の自分には理解されないだろう	-.09	-.03	.18	.66	.51
(対他) 12	自分は周囲の人々によく理解されていると感ずる	-.07	.03	.15	.52	.37
(対他) 16	※人前での自分は、本当の自分ではないような気がする	.04	.22	-.08	.48	.48
α係数		.87	.84	.83	.82	
因子寄与率		35.461	13.999	7.73	6.879	
累積寄与率			49.46	57.19	64.069	

( )内は谷(2001)の下位尺度名：対自=対自的同一性、連続=自己斉一性・連続性、社会=心理社会的同一性、対他=対他的同一性。※は逆転項目。

Table 3  
MEISの因子間相関

	対自的同一性	自己斉一性・連続性	心理社会的同一性	対他的同一性
対自的同一性	—			
自己斉一性・連続性	.33	—		
心理社会的同一性	.51	.51	—	
対他的同一性	.25	.62	.45	—

## 2. パス解析

友人関係の3つのあり方(「気遣い」「積極的」「関係回避」)が、自我同一性における4つの次元(「対自的同一性」「自己斉一性・連続性」「心理社会的同一性」「対他的同一性」)に及ぼす影響をパス解析により検討した(Figure 1)。全ての変数を観測変数として扱った。パス図については、友人関係のあり方の各々が全ての自我同一性の次元に影響を与えると仮定したモデルを作成した。分析には統計パッケージのAmos(ver.5)を用いた。パス解析を行い、標準化推定値が有意でないパスを削除した結果、Figure 1に示すように、5%水準で全て有意である標準化推定値が得られた。適合度指標は、GFI=.994、AGFI=.964、RMSEA=.000であり、検討したモデルが十分にデータに適合していることが示された。



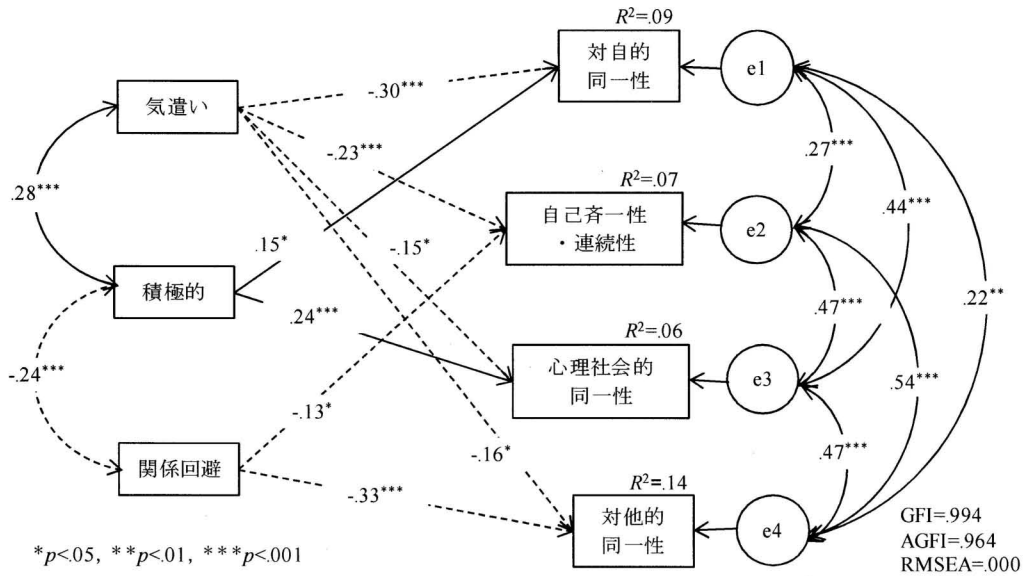


Figure 1. 友人関係各因子得点とMEIS各因子得点のパス図

パス解析の結果より、友人関係のあり方から自我同一性のそれぞれの次元へのパスについて検討したところ、

- 1) 「気遣い」から自我同一性の全ての次元への有意な負のパスが見られ (「対自的同一性」:  $\beta=-.30$ ,  $p<.001$ ; 「自己斉一性・連続性」:  $\beta=-.23$ ,  $p<.001$ ; 「心理社会的同一性」:  $\beta=-.15$ ,  $p<.05$ ; 「対他的一同」:  $\beta=-.16$ ,  $p<.05$ ) , 傷つくことを恐れ、友人に気を遣う関わり方が自我同一性の全ての次元に負の影響を与えていることが示された。
- 2) 「積極的」からは「対自的同一性」 ( $\beta=.15$ ,  $p<.05$ ) , 「心理社会的同一性」 ( $\beta=.24$ ,  $p<.001$ ) への有意な正のパスが見られ、友人に対する積極的な関わり方が、自分自身の目標・目的を明確に意識し、集団 (社会) と適応的に結びついているという感覚を得るという自我同一性の次元に正の影響を与えていることが示された。
- 3) 「関係回避」からは、「自己斉一性・連続性」 ( $\beta=-.13$ ,  $p<.05$ ) , 「対他的一同」 ( $\beta=-.33$ ,  $p<.001$ ) への有意な負のパスが見られ、友人との深い関わりを回避する関わり方が、自分自身の一貫性の感覚や他者から見られている自分と本来の自分との一致の感覚という自我同一性の次元に負の影響を与えていることが示された。

## 考察

### 1. 考察

本研究では、大学生を対象に、岡田 (1995) の友人関係尺度と谷 (2001) の多次元自我同一性尺度 (MEIS) を用い、どのような友人関係のあり方が青年期の自我同一性の確立に影響を与えているか、また、友人関係のあり方によって、影響を受ける自我同一性の次元が異なるかどうかについて検討することを目的とした。

第一に、どのような友人関係のあり方が青年期の自我同一性の確立に影響を与えているかという問題について検討した。パス解析の結果より、「気遣い」と「関係回避」から自我同一性の複数の次元への有意な負のパスが見られ、「積極的」から自我同一性の複数の次元への有意な正のパスが見られた。このことから、傷つくことを恐れ、友人に気を遣う関わり方や、友人との深い関わりを回避する関わり方をする人は、自我同一性の確立感が

低くなり、一方、会話や触れ合いによって、積極的に友人との快活な関係を求める関わり方をする人は、自我同一性の確立感が高くなることが明らかになった。先行研究では、相手との親密な関係を回避したり、相手を過度に気にしたりするような関わり方と自我同一性の確立との間に負の関係があるという一貫した結果が得られており(山本・岡本, 2008 など)、本研究の結果も先行研究の知見を支持する結果といえる。一方、「積極的」は、青年期における望ましいあり方である内面的な友人関係の特徴でもある、“親密で内面を開示する”ような関わりを表す項目からなっており、「積極的」な関わりが自我同一性の確立感の高さに影響を及ぼすという本研究の結果は、友人との内面的な関わりがアイデンティティの統合と関連する(宮下・渡辺, 1992)という先行研究の知見を支持するものと言える。

第二に、友人関係のあり方によって、影響を受ける自我同一性の次元が異なるかどうかという問題について検討した。「気遣い」「関係回避」は、両因子とも自我同一性の確立に負の影響を与えているが、「気遣い」が自我同一性の全ての次元の確立に負の影響を与えているのに対し、「関係回避」は自我同一性の「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」のみに負の影響を与えていた。ここに、「気遣い」と「関係回避」との性質の違いが現れているといえる。

1) まず、「気遣い」、すなわち、傷つくことを恐れ、友人に気を遣う関わり方は、自我同一性における「対他的同一性」「自己斉一性・連続性」「心理社会的同一性」「対他的同一性」のすべての確立感に負の影響を与えている。つまり、互いに傷つけないよう、友だちの内面を気遣い、友だちからどう見られているかを気遣う友人関係の持ち方をする人は、「自分から見た自分」の感覚(対他的同一性)も「他者から見た自分」の感覚(対他的同一性)も低く、「自分のまとまり感や常に自分であるという感覚」(自己斉一性・連続性)や「自分を社会的に位置づける感覚」(心理社会的同一性)も持ちにくい。

この結果は、「気遣い」の、自己評価の低さや内省傾向の高さ(岡田, 1993)が反映されたものとも言える。というのも MEIS は、どの程度自我同一性が確立されているかを客観的に測るものではなく、あくまで自分自身の主観に基づいた、自分自身をどの程度掴んでいるかという感覚を測定している。このため、自己評価が甘ければ得点は高くなるし、反対に自己評価が厳しければ得点は低くなる。「気遣い」関係をとる人は自分の内面に対する意識の強さから自己評価が厳しくなり、自己を掴みきれていないと評価しやすいと推測できる。

したがって、「気を遣う」友人関係をもつ人は、自分や他者の内面に目を向け、自分や他者から見た自分を意識することで、常に揺らぎ続ける自分像や自他の関係性を推し量り続けている。つまり、そのような営みを通じて、あらゆる側面からの自我同一性の感覚を獲得する作業をおこなっている渦中にある、と考えることができよう。

2) 対して「関係回避」は、「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」に負の影響を与えている。これは、友人との深い関わりを回避する関わり方が、自分自身の一貫性の感覚や、他者から見られている自分と本来の自分との一致の感覚という次元に負の影響を与えているということを示している。つまり、友人との関わりを避けることが、他者から見た自分と自己像とのズレを増し、自分のまとまり感や自分であり続ける感覚を不確かさを増す。

このことは、友人との関わりを避けることが、「友人は自分をこう思っているのではないか」という他者から見た自分と自己像とのズレを扱うことを避けることになり、そのズレを摺り合わせて自己像や自己感を確認していく作業を避けることで、他者から見た自己像に振り回され「自分のまとまり感や連続性の感覚」が揺らぐ、ということを示していると考えられる。このことは実は、現在の時点での自我同一性獲得における課題が、「対他



的同一性」や「自己斉一性・連続性」の次元にあるために、回避的な友人関係をもつ、という逆のパスの存在をも暗示している。つまり、友人と深く関わることで、「他者から見た自分と自分から見た自分のズレ」を生むために、「自分のまとまり感や常に自分でありつづける感覚」が揺らぐことにつながるため、その揺らぎを避けるために、友人との関わりを回避すると推測できる。したがって、「対他的同一性」「自己斉一性・連続性」の課題が関係回避的な友人関係を生み、さらに回避的な友人関係をもつことが「対他的同一性」や「自己斉一性・連続性」を不確かにする、という循環を形成している可能性が考えられる。

加えて、今回の結果は、こうした、「対他的同一性」や「自己斉一性・連続性」の感覚が、他者との関わりを抜きにしては獲得され得ないものであることを示すものと考えられる。

3) さらに、「積極的」は、「対自的同一性」「心理社会的同一性」に正の影響を与えている。これは、友人に対する積極的な関わり方が、自分自身の目標・目的を明確に意識したり、集団(社会)と適応的に結びついている感覚を得たりするという自我同一性の次元の確立に正の影響を与えているということを示している。特に「心理社会的同一性」への影響力が強かったことから、「積極的」の友人関係の社会への順応度の高さが窺える。表面的な関係に留まる岡田(1995)の「群れ」には見られない、積極的に友人に自分を開示する姿勢が、目的意識の明確さや社会への順応を高めることに繋がったと考えられる。

以上より、友人関係のあり方によって影響を受ける自我同一性の次元が異なることが実証された。友人に気を遣う関わり方と、友人との深い関わりを回避する関わり方は、どちらも自我同一性の感覚を握みにくくするが、影響を与える次元は異なっており、特に、他者から見られている自分と本来の自分との一致の感覚の獲得は、他者との関わりを必要とすることが示唆された。また、社会との適応的な結びつきの感覚は、積極的に友人に自己を開示する関わり方によって獲得されており、従来の青年期の特徴でもある“親密で内面を開示し合う”友人関係の必要性が示唆された。

## 2. 今後の課題

本研究で仮定したモデルにおいて、決定係数の値がどれも低かった。これは、自我同一性の確立が友人関係のみでは説明できないということを示している。今後、自尊心や充実感、基本的信頼感など、自我同一性の確立に影響するとされている他の尺度も用いて、より当てはまりの良いモデルを構築する必要があると考えられる。また、今回用いた岡田(1995)の友人関係尺度が、ある程度の妥当性は備えているものの、研究ごとに因子構造が微妙に異なる不安定なものであったことも決定係数の低さに影響したと考えられる。本研究の因子構造が先行研究と微妙に異なった要因の一つとして、友人関係尺度が作成された年代が挙げられる。友人関係尺度が作成されたのは1995年と15年近く前と、インターネットや携帯電話などが本格的に普及する以前であり、青年をとりまく環境や関係をもつための情報ツールなどが変化を遂げた現代における友人関係に即した観点から、タイプ分けを再検討する余地があると考えられる。

## 引用文献・参考文献

- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The psychoanalytic Study of the child*, **22**, 62-186.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. W.W.Norton. (仁科弥生 (訳) (1977). 幼年期と社会 I・II みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)

- 伊藤 亮・村瀬聡美・吉住隆弘・村上 隆 (2008). 現代青年における“ふれ合い恐怖的心性”と抑うつおよび自我同一性との関連 パーソナリティ研究, **16**, 396-405.
- 金子俊子 (1995). 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, **6**, 41-47.
- 松下姫歌・吉田芙悠紀 (2007). 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要, **56**, 161-169.
- 宮下一博・渡辺朝子 (1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, **40**, 107-111.
- 二宮克美・大野木裕明・宮沢修次 (2006). ガイドライン生涯発達心理学 ナカニシヤ出版
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友だちとのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係, **4**, 162-170.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 千石 保 (1991). “まじめ”の崩壊：平成二本の若者たち サイマル出版会
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 谷 冬彦・宮下一博 (2004). さまよえる青少年の心 北大路書房
- 谷 冬彦 (2008). 自我同一性の人格発達心理学 ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎 (2002). アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・山本 力・宮下一博 (1984). 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版
- 山本彩留子・岡本祐子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性 広島大学心理学研究, **8**, 107-120.
- 安井圭一・谷 冬彦 (2008). 現代青年の友人関係と自我同一性との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (17), 212-213.